

Citizen activity information magazine

三浦市民生活向上会議会報

〒238-0102

神奈川県三浦市南下浦町菊名1258-3

三浦市総合福祉センター

電話 046-888-7347

発行：社会福祉法人三浦市社会福祉協議会

発行責任者：出口 道夫

Vol.11

第八回ボランティア活動推進部会開催

去る一月二十二日、今年度第八回目となるボランティア活動推進部会が開催されました。今部会では、ボランティアの振興において最も重要な「人材育成」について話し合いました。



今部会では、ボランティアの振興において最も求められている「ヒト（人材育成）」を中心に話し合った。まず事務局が、ヒト（人材育成）に関する「現状と課題」、そして、その解決策となる方針（施策）について説明。「現状と課題」については、先におこ

なったアンケートの結果に加え、ボランティアコーディネーターの所感、部会員の所見を集約したものである。その「現状と課題」を解決すべく、大きく二つの施策を示した。そして、①活動者の「意欲」を応援する②地域から吸い上げたニーズを活動者にフィードバックするーといった目標を掲げた。

そのうちのひとつが、ヒト（人材育成）の要となる各種講座（ここでいう「講座」とは、地域福祉に関する知識や技術の習得を目的とした講習・学習会のことである）に関する施策である。

一 地域課題に基づいた講座の開催

社協事業を通して把握した生活問題や地域的課題を①当該住民にフィードバックする②その解決に向けて活動を共

にしようという当該者へのレクチャー。③活動者自身が自らソーシャルアクションを起こす際の支援体制の確立。④地域の見守り活動の促進と人材養成⑤受講者のモチベーションを維持するためのステップアップ講座の開催⑥前項⑤を効果的に開催するための関係機関のネットワーク化（仮称「福祉人材ネットワーク」）⑦各世代に合った講座の開催ーなどがそれである。

二 ボラ・市民活動団体が開催する講座への支援

場所の提供、助成金交付、情報発信といった支援に加え、市内最大の市民活動共同体である「三浦市ボランティア連絡協議会」が開催する講座も支援する。とりわけ、三浦市ボランティア連絡協議会が開催する講座がより地域住民に開かれたものとなるよう側面的支援を強化する。

三 その他各機関が開催する講座への支援

社会福祉協議会という組織の特性（福祉関係団体の過半数が参加している）を最大限に活用し、関連講座の情報発信とコーディネートに努める。

二つ目の施策は、「活動の足掛かりとなるような支援」である。

一 体験型イベントの開催

①ふくし探検ツアーの側面的な支援②体験型イベントの開催・開催支援

二 ホームページの整備

①活動の追体験ページの新設②活動の「きっかけ」となるような情報をカスタマイズして発信。地域社会に課題を提起するようなページを新設

三 青少年への教育

①わいわいキャベツっ子の支援②福祉教育の実施③教員向け福祉教育ガイダンスの実施

四 勤労世代への支援

①勤労世代の活動者情報を広報②余暇を利用したボランティア活動の促進（土日祝日）③市内民間企業を対象としたボランティア・市民活動の情報発信

五 三浦市社協内でのボラの受け入れ態勢の整備

①各部署のボランティア受け入れ態勢の整備と職員の意識づけ。②ボランティアセンターはその情報の共有化を図る。



目標について

日景 「地域から吸い上げたニーズを活動者にフィードバックする」という行為が、どのように人材育成に寄与するのか分かりにくい。

石川 それまでは知らなかった地域に潜在する課題を「知る」こと、そして、その課題を知った者同士が、繋がるのが「フィードバック」なのではないか。これは、人材育成というよりも計画全体の目標になるだろう。

石川 とところで、事務局が考える理想的なボランティアの育成像とは？

佐藤 ボランティア自身がボランティアを育てるとい

が、人材育成の理想的な姿だと考える。

石川 それはいい。「活動を続ける人を増やす」というのも、わかりやすい目標の一つになるのではないかと。

佐藤 目標については、再考する必要がある。(佐藤)

活動の入口

水野 みうら市民まつりでおこなった「ふくし探検ツアー」に、臨海高校の生徒が参加してくれた。きっかけは、顧問の先生の「参加してごらん」という一言である。小・中学校でも「市民まつりでこういう体験があるから、行ってみたいら？」と先生が一声かけてくれたら、沢山の子どもたちが参加してくれるのではないかと。

佐藤 計画の中で、体験的な講座を増やしたいと考えている。理解が活動に繋がるのではなく、体験が理解を深めるのではないかと。(佐藤)

石崎 私どもの作業所では、小学生の来訪を受けている。障害者と直接触れ合うことで理解が深まっているのではないかと。こうした経験が後々生きてくると思う。

石川 例えば、ふくし探検ツアーを開催すると、未経験者

がボランティア活動を疑似体験できることに加え、活動の認知度が上がる。活動の入り口としては、最適なのではないかと。

石川 アンケートの結果から、「友人・知人の誘い」が活動のきっかけになっていることがわかった。一連の活動を「仲間づくり」と捉えてはどうだろう。仲間づくりの結果、「来年もまた会おう」というサイクルができるといい。

活動者の組織化

芦澤 昔あった「みうら青年ボランティアビューロー」のような、三浦市内の様々な活動の核となる組織が必要なのではないかと。

石川 ウォーナンズグループにホームステイした児童のOB・OG会がある。そこへ組織化を呼び掛けてみたらどうだろうか。

石川 講座から仲間を集めて



組織化することも継続的に行うべき。

水野 団塊の世代を対象とした講座やボランティア活動の紹介の「場」があるといい。この年代を上手く活用すべきだと思う。

水野 繋がりがたくとも繋がりが分らないので、「繋がりを支援するシステムがあるといい。」

石川 グループ同士で連携するような仕組みがあると面白い。

やりがい・充実感

石川 活動によって充実感が得られれば、活動を続けるのではないかと。モチベーションは「自分の出番がある」「期待されている」「褒められる」「評価される」ことによって維持できるように思う。

佐藤 ボランティアコーディネーターのフォローも重要。ニーズと活動を結びつけるだけでなく、活動に対するアフターフォローも欠かせない。

石崎 ボランティアを受け入れるのは大変だ。それでも受け入れるのは「そこで育った人材が、いざれ地域社会の中で活躍してくれるであろう」という期待感があるからだ。使命感といってもいい。故に、

ボランティアを受け入れる側には、人材育成をする上での配慮が求められる。

その他

石川 活動団体が、自らによりよい組織になるようにセルフマネジメント力を身につけることが求められる。そのため支援が必要なのではないかと。セルフマネジメント力がつくことで、自分たちで講座を開くこともできるようになるのではないかと。

佐藤 まずは、社協職員が「ボランティア活動の振興」という自らに課せられた責務を強く認識する必要がある。(敬称略)

編集後記

▼文字校正で疲れ果てています(佐藤) ▼永井委員の代理で芦澤先生に来て頂き、たくさんご意見を頂きました。(杉崎) ▼やたらに言えないよ(出口) ▼プライバシーと個人情報保護の重要性を学びました(高井)

次回 ボラ部会
二月二十七日(水)
十四時〜 開催